



TITLE:

勢力經濟學序説

AUTHOR(S):

高田, 保馬

CITATION:

高田, 保馬. 勢力經濟學序説. 經濟論叢 1941, 53(2): 131-146

ISSUE DATE:

1941-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/131584>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號二第 卷三十五第

月八年六十和昭

論叢

勢力經濟學序説……………文學博士 高田 保馬

先秦經濟思想史序説……………經濟學士 穗積 文雄

支那銀行の畸形的推移……………經濟學士 德 永 清 行

研究

ナチス勞働保護政策の原理……………經濟學士 中川 與之助

ベンチュラム景氣理論に於ける貯蓄と投資……………經濟學士 一谷 藤一郎

價格安定政策の資本形成效果……………經濟學士 青 山 秀 夫

獨逸の廣域經濟論……………經濟學士 松 井 清

說苑

北支の物價高に就いて……………經濟學士 穗積 文雄

附錄

彙報

外國雜誌論題

經濟論叢

第五十三卷 第貳號

（通卷第百拾四號）

昭和十六年八月發行

論

叢

勢力經濟學序說

高田 保馬

一

今や世界を通して經濟は變質せんとしつゝあるといはれてゐる。それは國家權力の干渉が全面的に經濟の上に加はりつゝあり、經濟が政治的に決定せられつゝあるといふことを指す。而して多くの人人は、經濟學が此變質に應じ新しき經濟の把握にたへ得るが爲には、それ自體改造せられ變質しなければならぬであらうといふ。此問題に對して私が如何なる態度をとるかはい既に之を述べた。たゞこれだけのことは此際述べて置く必要を認める。今まで通説的位置を占めてゐる理論經濟學、別して純粹理論の名を以て知らるゝところのワラス以來の近代理論乃至數學派經濟學、又は壟太利學派的なる主觀價值説、溯つては古典學派等のすべてが直に持合せの道具即ち理論的手段を以てこの變質しつゝある經濟を全面的に説明することは不可能である。それは今までの效用分析や選

擇理論乃至需給學說以外の何物をか要するであらうし、此何物かは今までの理論にとつて、異質的のものであるといはねばならぬ。

例へば多くの人人の所謂經濟の自律性を中心にして論を進める。經濟は自律性をもち、之を展示してゐる。

此自律性をもつ限りに於ての經濟を理論的に把束するものが理論經濟學である。それは幾多の又複雑なる條件の下に、所謂與件を前提として經過する。與件は如何なる變動を遂ぐるにもせよ、經濟自體は效用の餘剰、價值の餘剰を追求する方向に動く。この動きの理論が理論經濟學の諸法則である、それは一の態度から導き出さるる結論である意味に於て、近代經濟學を必ずしもよく理解せざる人人をして應用數學に外ならず、乃至は分析命題の集積從つて何ものをも假定以外に教ふることなきものであるといはしめる。此批判が如何なる意味をもち得るかほかの機會に於て之を吟味するであらう。たゞかゝる理論を以てして今の統制又は計畫の下に於ける經濟の理解し得られざることは明である。それは近時に於ける經濟の變質が單なる與件の變化に止まらざることである。

ニユウデイル政策に至るまで、いはゞ間接統制、私の條件統制とよべるものまでは、これを與件の變動であるとなし、經濟自律性の分析によつて之を把束することが大體に於て可能である。けれども、ファツシヨやナチスの統制は既に直接統制であり、需給そのものの統制である。そこには經濟の自律性そのものが抑壓せられてゐる。従つて自律性がそれだけ侵蝕せられて自律性ならざるものとなり、いはゞ否定的なるものがそれに取代つてゐる。自律的分析を以て自律的ならざる經濟をつかみ得るはずはない。此意味に於て、今の經濟を與件の變化化としてのみ把束することは經濟理論のよくせざるところではないか。而して經濟理論の内容として所謂純粹經濟學のそれに一致せず、これと異なる立場にあるものといへども、それ等の經濟學そのものの性質が所謂經濟

の自律性の分析に終始してゐること疑を容れぬ。今までの經濟理論が新しきものを取り入るるのでなくては、新しき現實を説明し得ないといふまでもない。

二

私は今日の理論經濟學が變質しようとする經濟——勿論他の意味に於ては少しも變質するとは見ないのであるが——を把束し得ざることを主張するに止まらぬ。それは今までの所謂自由なる資本主義經濟そのものをすらも説明し得ないものではないかと思ふ。之を次の如くに換言し得るであらう。經濟理論はリカルドよりピグウ、ケインズに至るまで、メンガーよりシユムペティアに至るまで、ワラスよりパレト、ヒックスに至るまで、すべて經濟の自律性の分析に終始した。階級關係の要素を重視したところのマルクス理論乃至オツペンハイマアの獨占的理論に至るまでこの範疇の外に屬するものではない。けれどもかゝる立場は現代經濟學に課せられたる課題を正面から解決し得たであらうか。答へていふ否。

今日の國際的葛藤の唯一ならざるも有力なる根源の 하나가世界大戰後の不況にあることはいふまでもない。それは三〇%に及ぶ失業を伴つた。此失業の除却の爲に各國は最善の努力を拂つた。北米合衆國のニューディール政策、伊獨の全體主義的經濟政策皆これに屬する。従つて今日の政策の第一目標は此失業の排除にあつたのみならず、今の經濟理論の最も緊迫せる問題は失業の何故に生ずるかでなくてはならぬ。而してこの問題は十分の答を與へられてゐるか。失業に關する文獻は列舉しきれぬ位に多い、世界の優秀なる頭腦の多くはこれを取り上げてゐる。研究は量と質とに於て十分であるに拘はらず、其説明すらも與へられてゐない。或はいふであらう、ピグウ、ケインズ等の重要な文獻を看過しようとするのであるかと。私は答へていふ。さうではない。これらの人々

の卓越せる能力を以てしても答は依然として與へられてゐない。その立場のゆゑである。

失業は近代の世界の根幹をゆるがしてゐるほどの重要な事實である。然るに經濟理論は之を説明し得ない。

例をケインズにとつて云はう。ケインズは有意的なる失業と非有意的なる失業とを區別する。二者の區別は一に失業が自發的であるか即ち效用打算の上就業をさせてゐるか、又は就業が有利でありながらもなほ失業の已を得ぬ事情にあるかに存する。後者の定義についてはケインズ自身の敘述に分析を加ふべきものがあるけれども論述の大綱に關聯をもたぬから詳論しない。さて有意的なる失業は其實まことの失業ではないともいへる。けれども茲にはそれをも失業の中に屬するものと見て置かう。問題とすべきは眞の失業であるところの非有意的なる失業である。これは何故に生ずるか。ケインズは「勞働者が一定の水準以下の貨幣勞銀に於て就業することを欲せず、これを切り下げさへしなければ物價騰貴、實質勞銀減少の場合なほ、勞働の供給が其需要と共に増加し得る場合に非有意的失業がある」といふ。けれども貨幣勞銀の低下を何故に承知しないか。そこに失業問題の中心を打開すべき鍵があると思ふ。

ケインズは勞働者が貨幣勞銀の低下を承認せずといふ。それは何故であるか。實質勞銀の低下を忍ぶものが貨幣勞銀の低下を忍ばぬといふ理由はどこにあるか、經濟の自律性を前提し、餘剰の増大が追求せらるる以上、さういふことはあり得ざるわけではないか。これに對する何の解答もない、解答の努力すらもない。答がこれだけに盡きるならば、失業あるがゆゑに失業があるといふことに外ならぬ。理論は説明を要求する。而も此説明は與へられぬ。與へられぬのは所謂效用經濟の立場に立つからである。效用の餘剰を求むるものが低き勞銀に於て就業の有利なる場合、表面の貨幣勞銀の低下ある場合なほ就業を拒絶するといふことの如何にしてあり得るか。

かゝる事情の下に於てならば經濟原則に徹する限り、勞銀の低下を忍びて就業を求むべきにこれをしてしない。それは勞働者の求むるものゝ別に存するがゆゑである。

三

いふ所の經濟のアウトノミイとは何であるか。今日人々口を開けば云ふ。「經濟には經濟の自己法則性があり自律性がある。統制が必ずしも圓滑に進行しないのは、それが此アウトノミイの線に沿はざるがゆゑである」。

かういふ場合には於ける經濟の自律性の意義は十分に分析せられてゐない。

經濟とは何ぞや、これについては種々の答解がある。けれども些末の分歧を外にしていふと、要するに生活の爲にする物資の獲得であらう、この獲得そのものが經濟であるならば、それは極めて多様な制度乃至組織に於て行はるゝはずである。ところで今日所謂經濟の自律性は經濟一般が従ひゆくところの法則性ではない。經濟を營むところの主體が相交換し同時に生産する組織に於て各自が専ら效用と利潤の打算に徹するときに、經濟自體が必然的に進みゆく針路、従つて運動の法則がある。これを經濟の自己法則性、又は自律性といふ。此意味に於て經濟の自律性といはれてゐるものは、内容必ずしも此表現に副ふものでない。それは何れともあれ、統制の圓滑に進行し得ざるは經濟のアウトノミイの線に沿はぬ故であるといふのは、例へば價格を公定しても交換經濟の法則がこれよりも遙に高き價格を成立せしむるが如き事情にある以上、強制的十分ならざるところに此統制が實現せられ難いことを意味してゐる。

さて經濟理論は經濟の自律性を分析し之を把束するといふ。此場合前提とせらるゝものは經濟人である。與ふることによつて與へらるゝことを求むる態度、即ち受身によつて獲得する主體が前提せられてゐる。けれども經

濟主體がかかる態度をとる限り、そこには失業の可能性もなければ、過少利用（いはゆる過少雇傭）のまゝの状態に於て勞銀が限界生産力に於て定まるといふこともあり得ない。

與ふることによつて與へらるゝ態度をとるものゝ經濟、即ち私がかつて效用經濟と名づけたる經濟にあつては、失業のあり得るわけがない。何となれば勞働の供給者は自己の勞働を以て自ら生産し得ざる限り、與へらるゝだけの勞銀に於て勞働を供給するほかはない。若し勞働の苦痛又は自ら生産し得るものゝ效用によりて定まるところの供給價格を主張することあるにしても、勞働の需要價格これに及ばざるがゆゑに就業し得ぬ場合があるならば、それは自己の意志に基く失業であり、従つてまことの失業ではない。さういふものでない限り、就業の機會を求めて得ざるわけではないのである。企業側のあつては、追加せらるゝ勞働が一層低き生産力を舉ぐる以上、それだけの價格に於て需要する。さうすると全部の勞働が雇傭せられる。利用せられざる生産要素は残り得ない。

今日失業が不斷の事實となつてゐる場合に於て、勞銀の高さは一に勞働の限界生産力によつて説明せられつゝある。この點は、所謂古典學派の傳統を受けつぐと稱せらるゝ人々に於てさうであるが如く、これに批判の鋒をさしむけてゐるケインズにあつても亦然り。ケインズにあつて、實質勞銀が勞働の限界生産力に一致する。而もこれらの學者に於ける根本の立場とかゝる勞銀理論とが如何にして兩立し得るか。同一のことを他面からいへば、經濟の自律性を前提とする立場、效用經濟を前提とする立場からいかにして此勞銀の高さを説明し得るか。ケインズの認むるが如く、現在の勞銀に於て勞働したいと思ふところの失業者が多數に存在する。彼等は經濟人である限り、今よりも低き勞銀に於ても勞働を供給しようとする態度に出づべきであらう、而して勞銀は更に低

下すべきであらう。勞銀引下によりて新に勞働を吸收する餘地ありやは一の問題であるとしても、少くも失業者の側から勞銀引下の態度に出づべきは、而して勞銀のたへざる低下を見るべきは、經濟人の前提からさけ得られざる結論である。此理論的必然の前に眼を蔽へる勞銀理論は理論としての價值を有せずといふべきものではないか。

勿論勞働の供給函數がすべて勞働の不效用によつて定まるものと見られ、而も、勞働の生産力函數と此供給函數との關係から勞働の需給價格共に定まると見る場合にあつては、なるほど雇傭の範圍にもれた勞働の側から勞銀引下の運動の開始せらるべき理由も消滅する。此場合個々の主體にとつて勞銀の效用は勞働の不效用に等しい。けれども失業が勞働の市場價格に於て勞働供給の意志を有しながらその需要せられざるもの、即ち勞働の意志を有して其機會を有せざるものと解せらるゝ限り、そこには失業がない。所謂有意的失業は失業ではないはずである。けれども現實の經濟がかゝる状態にあるといふならば、それは現實の甚だしき歪曲に外ならぬ。現在與へられたる勞銀よりも實質的に低き勞銀に於て勞働の機會を求むるものゝ多いことはケインズの注目したるが如く争ひがたき事實である。物價が騰貴したからといつて自ら勞働の機會を放棄しようといふ勞働者はない。雇傭の範圍内にある勞働者が此の如く低き供給價格をもつといふことは、無範圍外にまたあまたの此働者が更に低い勞銀に於てなほ勞働し得る機會を求めつゝあることを示すのではないか。働かんとして働き得ざる意味の失業の存在することは疑ひ得ざる事實である。かゝる事情の下に於て勞銀が限界勞働の生産力に於て定まるといふ道理はない。

四

今日の失業をもつがまゝの状態にあるところの均衡の理論が、はじめてケインズによりて明にせられたといはれてゐる。而してかゝる理論がその特有なる利子論によつて基礎づけられるともいはれてゐる。なるほどケインズ自身の構論に従へば、銀行の態度が利子歩合を定め、それがひいて投資數量を決定し生産總量と所得とを決定することによつてこれら諸數量間に短期的なる均衡が成立するといふことになる。而して利子に従つて定まる投資が社會の消費財需要の減少を補ふだけの高さに達せざればそこに過少利用のまゝの均衡より成立し得ない。

けれどもかゝる主張はどれだけの理論的必然性をもつか。此主張の背後にはハアバラアの幾たびか力説してゐるやうに、勞銀の不撓性又は安定性の前提がかくされてゐる。若し失業者の側からの勞銀切下の運動が進行し、勞銀が低下するならば、勞働はそれに應じて新しく吸収せらるゝであらう。而して完全利用に至るまでこの運動は進行し従つて不充分利用の均衡といふものは存立し得ないであらう。かくして遂にすべての勞働が就業するに至つてやむ。勿論かゝる状態が安定的なる均衡であるといふことは出來ぬ。企業と勞働者との雙方が其利益を更に進みて追求する限り、新しき利子歩合に於ける均衡の成立を見るに至るであらう。

その點は如何であるにせよ、かゝる不充分利用に於ける均衡を成立せしめてゐる勞銀の不撓性といふものは何であるか。それは要するに勞銀の切下に對する抵抗である。少くも景氣の下降しようとする情勢に於てはさういひ得る。これは何によりて生ずるか。或るものは勞働組合の作用、従つて獨占供給の結果であるといふ。これを全然否定すべきではないが、かゝる不撓性は勞働組合をまつてのみ存するのではない。或は國家統制ことに社會政策の結果であるといふが必ずしもさうではない、それのないところにも此不撓性はあまりに顯著である。ハアバラアは傳統をもつてこれを説明しようとしてゐる。シユムペティアもまた勞銀の惰性を説き傳統をもち出してゐ

る。けれども此場合傳統の意味するものは何であるか。傳統自體が生産力のあるところ勞銀を引上げべしといふ内容をもつところには、いはゞ資本の寛仁を内容とするならば、かゝる現象は生じ得ないであらう。従つてそれは傳統といふものによつて直に説明し得らるゝものではない。ある内容をもつ傳統によつて説明し得らるゝであらう。それとともに同一の内容の妥當性を支持するものならば傳統たると時代の輿論たるとに關係するところないはずである。此内容といふのは一定の勢力關係そのものに外ならぬ。一定の人々の地位又は社會的勢力關係が傳統により又は輿論によつて保障せられ支持せられてゐるときに、その社會的待遇は一定のものとして自らを支持しようとする惰性をもつ、所謂不撓性といふのはその側面に外ならぬ。

従つて失業の分析は必然に此勢力の作用にまで到達せねばならぬ。もとより勢力の何であるか、それが如何なる構成をもち如何に變遷してゆくかといふことは社會學的考察の對象をなすであらう。従つて經濟理論の内部に於て取扱はるべきことからではない。けれども、古典學派は生産費の作用を見て效用の作用を十分に認め得なかつた。後者を十分に認めざる限り、經濟の全面を把束する理論に近づくことは出来ぬ。ところが同様に今日の經濟理論は效用の作用を見て、勢力の作用を見ぬ。これによつて經濟の全面、ことに變動の機構をつかむことは出来ぬ。現に失業の最も重要な經濟を眼前に置いて失業そのものを説明し得ずにある。これはケインズばかりのことではない。所謂有産者經濟學といはるゝもの、無産者經濟學といはるゝものを通じてともに然り。ケインズ以外の所謂正統學派の人々は已を得ざる失業、いはゞまことの失業の存在を認めさせずにゐる。失業といへば勞銀の效用が勞働の不効用に及ばぬものとしてゐないか。さうであるならば眞の失業は社會に存在せぬ。失業ありといつても地主の遊休の如く自發的のものであり、それが爲に何の對策をも講ずる必要はないはずである。ケ

インズは已を得ざる失業に注目しこれを認めただけである。これを説明する爲に自己の經濟理論に反省を加ふることもない。若し所謂無産者經濟學の人々にあつては、資本の有機的構成の變化によつて失業が生ずると見てゐる。此有機的構成そのものが勞銀の結果として定まることを考へない。ところで勞銀が生産財の賣残りなきところに落ちつくといふ效用經濟の原則を貫き通すならば、いづこに失業が必然であるといふ論理が残さるか。而してマルクス自身、經濟をあくまで經濟のアウトノミイによりて説明しようとしたではないか。尤もマルクスに於ける勞銀の歴史性社會性をもち出さうとするならば、其歴史性は言葉以上のものでないといひたい。以上のものであるならば、それは勢力の作用に分析せられねばならぬであらう。

五

茲に企圖するところの經濟理論の改造はもとより、前提とするところの理想型としての經濟、從つてその中に作用する主體の概念の改造なくして行はれ得ざること明である。通用の經濟理論は常に經濟人を以て前提とする主體となし其構成するところの經濟即ち效用經濟について種々なる法則を求めて來た。かゝる前提がとらるゝ限り、種々なる法則自體に何等の理論的誤謬はない、それはある意味に於て一種の分析判斷に過ぎないであらう。けれどもそれが現代の經濟にあてはまるものであるか、其真相をつかみ得たるものであるかといふに、さうではない。その次第は繰返して述べたところである。

そこで經濟理論の改造はいふまでもなく經濟主體の概念の改造を必要とする。經濟人が實在せずといふ理由を以て效用經濟の理論を否定しようとし乃至之を斥けようとするものは多い、けれども理論を構成しようとするとき必然に抽象を行はねばならぬ。前提とする經濟を構成するところの主體は常に現實の經濟から若干の距離のとこ

るにある。従つてそれは如何なる場合に於ても實在しない。實在せぬといふことは經濟人の概念の難點ではない。たゞそれによつて得られたる法則が現代經濟の最も重要な事實を全く説明し得ない。さうである以上、更に異なる主體概念を以て置きかふことが必要となる。

これは一部の人から、認識の手段であるから便利のものに置き換へればいゝと表現せられてゐることに近く見える。けれども、それは全然單に思惟の構想にかゝるものを道具として用ふる意味ではない。經濟人が最も強く作用して現實の經濟を動かしてゐるとは見がたく、他の種の主體の作用が支配的であると見ざるを得ぬといふことを意味する。従つて求めてゐるものは單に一方的高昇によるウトビイとしての理想型といふものではなく、此一方的高昇の最も少くてすむところの、いはゞそれによつて得らるゝ概念と現實の經濟との距離の最も小さいものあることを要し、従つて實在の型であることを要し、現實の經濟的事實は此型が他の種々なる偶然によつて變容せられたるものと見られる。なほ一たびこれと理想型との距離を明にしよう。現實の經濟から價值關係に従つて一定の要素又は傾向に重點を置きこれを一方的に高昇せしめて到達し得る極限概念といふ意味に於て、人は同一の權利を以て甲乙丙等の理想型概念に到達し得るであらう。今の經濟の分析から資本主義の概念（たとへばゾムバルトに於ける）に到達することも出来るが、同時に國家社會主義の概念に到達することも出来るし、又中世的の封建經濟の概念に到達することも出来る。認識の目的に従つて何れを構成するかといふことは任意であり自由であらう。けれども求むるところが實在の型であるといふことになる、もはやかゝる自由は失はれる。而して現實にまで自己を實現するものとして考へらるゝものが選擇せられる。此選擇はもはや任意ではない。たゞ一の標準があるばかりである。同様な理由によつて經濟主體の概念としてもはや經濟人の概念を以て満足することは

出來ぬ。換言すればそれは極めて有意義なる一の理想型であり得ても、現實の經濟の築かるべき地盤としての實在の型として選擇せられがたい。

物資の獲得が二種の方法によりて行はれる。一は受動的態度である。これは廣義に於ける交換としていひ表はれ得る。時として經濟的手段といはるゝものはこれである。自然からの生産に於て人は出來るだけの努力を加へて與へらるゝものをまつ。社會的な交換に於ても同じである。一般的には一定の商品を提供して與へらるゝものを受取る。この態度は何れの場合にも共通してゐる。これと對蹠的地位にあるものは政治的手段である。即ち代償を提供することなく、勢力によつて、例へばある特殊の場合には暴力によつて、而して多くの場合には合法的なる權力によつて、賣買の形式をまつことなく、徵用し收用する。此二の中間に於て二者の綜合形態が考へられる。即ち廣義に於ける交換の形式によるがまた勢力關係がそこに作用して、少く與へ多く取り得る場合には、それによつて利益を得つゝ、従つて相手からいへば已むなくそれだけの不利を忍びつゝ交換を行ふことがあらう。これは前の二がそれぞれ、經濟的手段政治的手段であるに對して、政治經濟的手段といはれ得るであらう。而して第一の手段に徹する主體を經濟人といふに對し、第二の手段に終始する主體を政治經濟人又は勢力經濟人といふ。勢力經濟人は一定の國家組織の中に於て經濟的活動を營むから、彼は物理的強力を用ふことはない、法律と慣習、輿論、道德の下に於てその置かれたる地位に従ひ之を利用して物資を獲得しようとする。此勢力經濟人が非實在的のものであり抽象的のものであるといふ點はいつに存するか。獲得の要求に出來るだけ努力するといふこと、従つてその有するところの勢力關係を獲得の爲に利用することを忘れぬといふ點にある。其場其場の義理や人情に従つて此利用を斷念することもあり得ようし、詐欺奸策によつて陥れては利益を擱まうとするこ

ともあり得ようが、それらをすべて斷念することである。社會的勢力を支へるものとしては宗教も道德も慣習もあらうが、これらによつて支へられてゐる勢力そのものの利用に於ては利益の追求に徹して而もその合法的なる利用以外の態度に出でざることである。

私は屢々勢力の作用をとり入れて考へるといふ表現を用ひて來た。これを今の勢力經濟人との關係に於て明にしよう。勢力經濟人は力の欲望に従つて動く、此要求が經濟的活動の中にも滲透する。これは二のことを意味する。一方に於ては、勢力の表示である。一定の勢力をもつことを外部に向つて示さうとする、従つて其所得の使用に於て此誇示の要求を充さうとするばかりではなく、所得の高さに於て之を充さうとする。即ち地位相當と見らるる所得は必ず之を獲得しようとする。たゞこれだけの範圍に於ては勢力の作用が消極的である。これだけは其勢力に對應するものとして與へらるることを求むるといふ態度である。けれども勢力の作用はなほ一步進む。即ち其勢力を利用してなるだけ有利の交換をしようとするのである。これにあつては勢力を示さうとする要求のみならず、勢力の能動的方面を働かせようとする、相手を屈服せしめようとする。そこに於て勢力の作用が積極的であるといふことが出来る。

これだけの勢力の作用は屢々誤り考へらるるが如く、數量的に捕捉し得られざるものではない。技術そのものは數量的測定を許さぬであらうが、その作用は生産方程式の中に表現せられる。同様に勢力そのものの大きさを數量的に捕捉し得る手がかりはない。けれどもその經濟に於ける作用は需給の諸方程式の中に表現せられる。この表現の最も顯著なるものは、種々なる理由によつて、勞働の供給函數そのものの中に於てである。勞働の供給者にとつては勞働がどれだけに賣られ買取らるるかは、一面からいふと自己の活動に對してどれだけの待遇が與へ

らるるかであり、同時に自己の勢力がどれだけ作用を營み得るかの指標ともなるわけである。形は商品の賣買であるが如くに見えるけれども、實は人間の交渉である。従つてどれだけかを其體面の上に於て要求するし、その地位に應ずるもの、自己の勢力によつて獲得し得るものとして要求する。如何に今日の如く資本主義化したる經濟にあつても彼等は單なる經濟人として立つのではない。勞働の需要については今日企業が全然一の利潤追求機關として完全なる打算の上に立つ如くに見える。従つて勞働の生産力の全部をあげて之をその需要價格とすると思はれる。けれども事實に於てこれは需要價格の上限を限るものであり、所謂有效なる需要價格は寧ろ勞働の供給價格の反映である。勞働の供給者の社會的地位に應ずるところに其價格を定めるといふのが根本の標準であり、その上に値切り得るところまで値切らうとするから、大體供給價格を反映することとなる。

地代の支拂はるるところの土地用役の需給がまた勢力關係によりて強く作用せられる。勿論完全に人格的交渉を離れたる土地用役の賣買、例へば大企業と不在地主との取引の如きに至つては殆ど完全に經濟人的取引が行はれ得よう、たゞそれとても社會全體に於て定まる他の方面の地代の影響を受ける意味に於ては勢力干渉の反映を見るべきである。土地用役の賣買が人格的接觸を伴ふ場合、ことに農業地代の場合にあつては、此用役の需要者としての借地人又は小作人が多く受身の立場に立つ。地主が單なる商品でなく自己の土地といふ其人格との交渉を完全には切りはなしてゐないところの、而して永久に自己と結びつけるものの用役を與ふることについて一定の供給價格を要求する。借地人は多くの場合轉業の自由を有せず又移轉の自由を有せず、その社會的地位を背景にしてその態度を定め、此態度を需要價格として表明する。多くの場合、此供給價格に従つて之を定めざるを得ず、輿論慣習の之を許さざる場合にのみこれに對抗するところの需要價格を申出で得るであらう。

生産物の賣買とても完全に人格的交渉から解放せられ、打算と利益追求のみが支配するとは云はれ得ぬであらう。けれども一般に資本主義化したる現狀に於て、生産物の供給需要は人人に對する待遇、其社會的勢力の表明といふことから切離されてゐる。轉々何人の所有にも屬し得べき生産物の賣買に於て、其價格は人格と何の結合もないといひ得る姿にある。勿論こゝにも價格の傳統乃至は慣性といふものがあり、これが純粹なる打算の外に立つ一の力をなしてはゐる。けれども原本生産財の供給の如く財と人格との結合が不可離のものではない點に於て、勢力關係の作用が稀薄であり、一應これを抽象して考へ得ると思ふ。

六

ベエム・バワアクの勢力説批判とシユム・ペエタアのそれとは此問題に關する二の代表的なる文獻である。後者は勢力の作用をある程度までに認めながらも、一の立場からする理論の自律性のゆゑに勢力の干渉を抽象しようとする。これに對しベエムの立場は大體經濟に對する勢力の干渉の無力にして無效果なることを明にしようとする。ベエムの此點に關する立論の精緻は學說史の壯觀であるといふを妨げぬ。けれども大觀するにベエムの結論は純粹なる經濟人を前提とするところから来る。資本と人口と生産力の度盛（從つて生産函數）とが一定である限り勞働者の態度如何は全然經濟の上に作用するところなく、たゞそこに一義的な均衡が成立するといふ。けれどもこれは其實、經濟人を前提とするときには勢力が作用し得ずといふに外ならぬ。初めから勢力の作用を抽象してゐるから其作用のあらはれぬのは必然である。所謂政治經濟人を前提するとき、其結論は全く變化しなければならぬ。かゝる主體が前提とせらるる場合、所謂過少就業のまゝの均衡が必然に成立する。而して人口と資本とはそれ自體資本數量もこれを改め得ない、そこに政治的乃至勢力的な要素の作用がある。而して人口と資本とはそれ自體

が此新しき狀況に従ひ、それに適應する。いはゞ人口と資本とはもはや一の與へられたる條件とのみ考へらるることを許さぬ。それが勢力の間接の作用の下に動く。而して此條件と見られたるものの適應が進行して完全就業の方向に進行しようとする。かゝる視角から見ると人口と資本とは一の未知數としてあらはれる。而して諸財の需給價格と共に相關的に決定せらるるものとなる。これが所謂政治的要素の作用である。

ベエムの立場からは經濟に失業もない。同時に景氣の變動も考へられない。それは刻々に完全就業の均衡に接近しつゝあるからである。而して、純粹なる經濟人が前提とせらるる限りこれは必然の結論であらう。而してベエムがかゝる立場に立つのはその學問的不名譽ではなくして、その透徹せる思索力の象徴である。經濟人が前提とせらるる限り失業のあるはずはない、又景氣變動もあるはずはない。今日景氣變動の説明は必ず其一環として勞働供給の弾力性の因子をあげる。これなくして景氣變動の説明は行はれ得ない。それは景氣理論上如何なる學説をとるも同様である。ところで此弾力性といふものは經濟人の想定からは導き出されぬ。經濟人の前提の上に立つ今までの、ことに英國經濟學は政治的要素乃至勢力の要素を密輸入することによつて失業と景氣との理論を構成してゐる。其理論をして首尾一貫せしめようとするならば、此前提そのものを變更しなければならぬ。然らずとせば、ベエムの立場に立ちかへる外はない。

私のいふ如き勢力説の立場にあつては經濟人の前提をすて去るべきであるといふ好意的批判は十年前から和歌山高南北野熊喜男教授から會談の中に反覆示唆せられたところである。私はこれに抗辯を續けた、それには斯學二百年の傳統に離れて自ら何をなし得るやと考へたことも手傳つてゐる。けれども論理は直線に進まねばならぬ。妥協は學問向上の道ではない。私は理論の峻嚴なる要求に従ふ。而して此機會に於て同教授に對し啓發の勞を感謝する(昭和十六年七月二日朝)。